

鹿児島城下「加治屋町」地名の由来 — 島津氏の鹿児島進出と城下町形成を背景として —

中 野 翠

鹿児島純心女子短期大学には「かごしま学」というユニークな共修講座がある。その歴史分野を担当しているが、導入として学生たちに、短大を下ったJR指宿枕崎線「郡元」駅や市電の周辺電停名の「郡元」「中郡」等の呼称にも触れることにしている。「郡元」は古代に薩摩国を構成した13郡の一つである鹿児島郡の郡役所の所在地域であったことを示し、「中郡」は郡役所や郡を守護する神社などが集まる郡の中心地であり、現在も中郡小の南隣りに一之宮神社が存在している。「純心学園前」という電停名も近くに学園が所在することを現在・未来に伝える歴史的役割を果たすことになる…と。すると、学生たちは目を輝かせて身近な郷土について興味・関心を示すと共に、過去の歴史が現在に繋がっていることに気づき、郷土への誇りをもちだすなど、自己変容する様子が授業や授業感想文等からも見て取れる。

本論では、近世の鹿児島城下「カジヤ町」は何故「鍛冶屋町」ではなく、「加治屋町」という漢字を当てたのかという疑問について、戦国大名・近世大名に成長した島津氏が取り組んだ城下町の形成・拡張過程等を通して、「加治屋町」地名の由来（起源）の考察を試みてみた。

1 近世大名島津氏による城下町の形成・拡張過程

島津氏の鹿児島進出と鹿児島の城下町づくりの起源は南北朝動乱期に遡る。動乱期の島津氏5代当主貞久は、鎌倉時代からの守護所の地である木之牟礼城（出水市高尾野町）に加えて、川内川左岸に碇山城（旧川内市）も構えた。さらに、貞久は鹿児島に進出し、南朝方の鹿児島郡司矢上氏とその一族の拠点でもある東福寺城（稲荷川口左岸の多賀山北

側)を攻略して6代氏久に与え、大隅半島領国化進展の拠点とさせた。動乱の収束期に家督を継いだ7代元久は、3代將軍足利義満から従来からの薩摩国守護に加え、大隅国と日向国守護も安堵された⁽¹⁾。そこで元久は領国統治の拠点として、動乱期の拠点であった東福寺城から、西北寄りの稲荷川右岸の丘陵地に清水城とその南麓に居館(清水中の地)を築き、その前面に本格的な守護町づくりを開始した。この頃、島津氏は薩摩・大隅国の国司の行政権を吸収し(国司制度消滅)、領国内の武士の家臣団化も進めて、薩・隅二国におおよそ領主権を行使できる守護大名に成長した。

その後14代勝久時代に領国統治が動揺し、薩州家島津実久に勝利した相州・伊作家の島津貴久が実力で宗家を継いで15代当主となった。貴久は三州の守護として、天文19(1550)年、新たに稲荷川右岸の微高地に内城(御内、館づくり)を築いて伊集院一字治城から移り住んだ⁽²⁾。16世紀後半は、中央では織田信長・豊臣秀吉による織豊政権期に当たるが、本県域では、戦国大名に成長する15代島津貴久と嫡子の16代義久父子が内城を拠点として、三州統一とその経営及び九州制覇を目指す時期に当たると共に、守護町を土台とする城下町の形成期でもある。この貴久・義久時代に、内城の周囲一帯が家臣武士の居住地域となり、寺院や神社の創建も続けられた。それに付随して、海岸寄り(鹿児島駅周辺)の地に商人・職人が集住を始めたと考えられる。豊臣秀吉による島津氏領国の太閤検地後(1595年)から関ヶ原合戦の翌年(1601年)までは豊臣秀吉朱印状⁽³⁾の影響(義弘を島津家家督相続者扱い)から、16代義久が鹿児島から富隈(霧島市)に移り、弟の17代義弘は栗野(湧水町)から帖佐(始良市)に移り、義久養子の忠恒は実父義弘の指示で鹿児島の内城に居住した。そのため、この時期島津家は三殿による政治体制に陥り混乱等が生じたものの、島津氏領国の中心は鹿児島城下町(上町地区)であり、稲荷川口の港が交通手段の拠点となった。

慶長8(1603)年、徳川家康が江戸に幕府を開設し新たな武家政権が誕生した。島津氏は関ヶ原合戦後苦境に追い込まれたが巧みな交渉で打

(1) 応永11(1404)年6月29日足利義満安堵下文『島津家文書之一』(東大出版会)

(2) 『島津國史』(鹿児島県地方史学会、昭和47(1972)年)115頁など

(3) 文禄4(1596)年6月29日豊臣秀吉朱印状『島津家文書之一』(東大出版会)

開し、根負けした家康は慶長7（1602）年島津義久に薩摩国・大隅国・日向国諸県郡の所領を安堵した⁽⁴⁾。義久代理として上洛した忠恒は、京都伏見城で家康に拝謁して所領安堵のお礼を言上した。忠恒は家康から「家」の字を賜り、家久と改名して島津家18代当主を承認され、やがて初代薩摩藩主となった。この間、島津家では新時代に即応した居城決定が緊急課題の一つであった。家久（忠恒）は中世上山城（城山の地）の改修と併せて東側山麓に新居館並びにその周囲に家臣たちの屋敷等の建設（新城下町建設プラン）を決断した。実父義弘は海に近すぎ軍事戦略上不利と反対したが、家久は慶長6（1601）年正月明けから諸工事を開始させた。この鶴丸城の築城開始年については、鹿大法文学部五味克夫教授（当時）が「鹿児島城の沿革—関係史料の紹介—」⁽⁵⁾及び「上山城と鶴丸城—近世鹿児島城の創建の年について—」⁽⁶⁾等で慶長6年と立証された。その根本史料である上井経兼の『経兼日記』⁽⁷⁾によれば、慶長6年1月17日の条に「御前上之山へ御出、諸侍屋敷盛被御覽せ……」、翌18日の条に「此日上之山之御普請初り候」とあり、同年1月から新城下町の縄張（全体の配置計画）がスタートしていることが分かる。上山城（通称鶴丸城、公称鹿児島城）の一期工事の完成は慶長11（1606）年頃と考えられる⁽⁸⁾が、その後も家臣らの日記に城山の地と麓の地での普請工事の記述が見られることから大工事の継続が窺われる。しかし、元和元（1615）年、幕府の一国一城令により、鶴丸城の呼称は山麓の居館（天守閣のない屋形（館）城）のみを指すようになり、山上の上山城はほどなくして廃城となった。鶴丸城本丸は藩主の居館及び藩庁として機能した。また、戦国時代の島津氏の拠点となった内城跡には大龍寺（臨濟宗）が建立された（大龍小の地）。

戦国時代の城下町である上町地区に対峙して、初代藩主家久はまず隣接する南部（下町地区）に武士屋敷等に充てる土地造成を進めた。その手始めは「落穂集下」（伊集院兼喜著）⁽⁹⁾によれば、「昔は上月川筋柿本寺前の様に打廻り流れ候を黄門様御代に今の川筋に為相直の由」とあ

(4)（慶長7年）卯月11日徳川家康起請文案『島津家文書之一』（東大出版会）

(5)『鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書（26）』（県教委、昭和58（1983）年）所収

(6)『黎明』（鹿児島県歴史資料センター黎明館だより、1984.12.25）所収

(7) 鹿大附属図書館玉里本、『鹿児島市史Ⅲ』資料編に収録（305頁）

(8)（慶長11年）5月1日・6月5日付義弘より家久宛書状『鹿児島県史料旧記雑録後編四』

(9)『薩藩叢書第三編』（薩藩叢書刊行会、明治41（1908）年）所収62頁

り、甲突川の旧川筋が城山西麓の柿本寺前を流れていたのを、家久が現在の川筋に直したことに始まる。『鹿児島県の地名』日本歴史地名体系47(平凡社)によれば、旧川筋は「新上橋から東側の平之町・千石馬場・加治屋町を蛇行し、俊寛堀辺から海に注いでいた」⁽¹⁰⁾という。家久以降も藩主たちが甲突川下流の川筋を南へと移し、鶴丸城前面(東側)の海岸を埋め立て、さらに波を防ぎ船荷の揚げ降ろしを行う波戸を築くなど旧・新城下町の拡張・整備を継続し、薩摩藩の領国統治の拠点として機能する城下町の進展を図った。川筋直しの工事概要は不明だが、現在も甲突川の東側に残る清滝川は旧川筋跡の一つとされる。

家久が始めた城下町づくりは、鶴丸城を中核として周囲に武家屋敷を、その外側(海岸側)に町屋敷を配置するという構成であった。城下士(初めは鹿児島衆)の居住地域を「方限(方)」、町方(商人・職人)の居住地域を「町」と呼んだ。戦国期後半に島津氏の拠点となった内城跡(大龍寺の地)の周辺地域が上方限、鶴丸城東・南部に江戸初期から形成された地域(南端は甲突川左岸)が下方限である。上・下方限の外側地域が上町・下町と総称された。「天保年間鹿児島城下絵図」⁽¹¹⁾に示された溝に、「是自り北ヲ上ト云ヒ、南ヲ下ト云フ」と朱注が入っている。上・下方限境となる溝の遺構は、名山小北側の歩道下の側溝に継承されている。

鶴丸城本丸跡地に黎明館を建設するに際して、県教委文化課(現文化財課)による遺構の発掘調査が行われた。当時、館建設調査室に勤務していた筆者は何回も現場に出向いたが、城山東麓境はきれいな湧水の地で驚かされた。本丸跡地はもと小丘陵地で、そこに盛り土をして台地を造成し山麓の三面を石垣で囲んで支え、外側に一重の堀を配置する大工事であった(南側図書館側の堀は19世紀前半に埋められた)。さらに、大量の湧水対策として排水溝や上水道用の石管を張り巡らしてあり、湧水は堀の水は勿論のこと、上水道用石管を通して城内のみでなく城下町の飲料水用としても活用されるなど、城下町の形成・発展に貢献している。『薩摩風土記(抄)』⁽¹²⁾は「第11図(水道高栴等絵図)」の説明

(10) 160頁(「薩摩天保度以後財政改革顛末書」から要約)

(11) 鹿児島市立図書館蔵(六曲半双屏風) *市立美術館蔵縮小複製版「鹿児島城下絵図」(大江出版)も発行されている

(12) 『鹿児島市史Ⅲ』資料編に収録(505頁)

に、「此水御城より流る、町中ののミ水とする」と紹介している。

ところで、江戸時代は身分制度により、武家屋敷と町屋敷の地は明確に区別されており、城下士でも家格により居住地に違いが見られる。鶴丸城近くには上級城下士が、下級になるほど城から離れた地に居住した。

上方限では大龍寺（内城跡）周囲の地に、下方限では鶴丸城東側の地に島津家一門や重臣の屋敷が集まっていた（城前面は空地〈防火のため〉・役所を設置）。その南隣りに今も残る「千石馬場」の地名は、1000石取り級の上級城下士の屋敷が立ち並んでいたことを示している。一方、城から離れた甲突川左岸の加治屋町一帯は小姓組クラスの下級城下士の居住地であった。武家屋敷の方限（方）と町屋敷の町との境界に関して、「天保年間鹿児島城下絵図」は次のように注記してある。上町の町屋敷地区に「上町都合六町」と朱書し、柳町の東側に「町口」、その外に「是自り武士小路」と注記してある。下町地区には海岸の港の場所に「下町都合十五町」と朱書し、さらに下方限との境には東西に細長く松林が描かれ（現松山通り〈天文館G3アーケード・銀座通りと照国通り間〉に該当）、そこに「是自り西武士小路」と注記してある。この絵図やその注記から、鹿児島城下も全国の城下町と同様に、武家屋敷地と町屋敷地の明確な区別を立証できる。また両者の人口比は「町三分に武家七分」と圧倒的に武家人口が多かった⁽¹³⁾。やがて人口増等により下級城下士の武家屋敷が甲突川右岸にも立ち並ぶようになり、出水筋の西田、加治屋町・新屋敷町対岸の上之園・高麗・荒田（この三地域を三方限と呼ぶ）や武方面まで城下町は西南部に拡大した。鹿児島城下は甲突川の左岸地域を「川内」、右岸地域を「川外」とも総称した。さらに、この「鹿児島城下」を、近郊の吉野村・坂元村・下伊敷村・原良村・郡元村などの近在24村（農村）と荒田浦（漁業地）・横井野町（商業地）が取り囲み、「鹿児島」という特別の区画が形成されていた。文政9（1826）年の鹿児島「城下」人口は5万8000人余、近在（周囲の村など）を加えた「鹿児島」人口は7万2000人余であった⁽¹⁴⁾。

(13)『鹿児島市史Ⅰ』326・327頁「鹿児島人口表」（要用集・薩藩政要録等で作成）など

(14)『鹿児島県史料集（1）薩藩政用録』（鹿児島県立図書館）所収

2 「加治屋町」地名の由来に関する一考察

鹿児島市の城下町は、残された城下絵図からも武家屋敷地と町屋敷地は明確に区分されていたことが立証できる。「加治屋町」は下級城下士の居住地域であり、町屋敷地に属し職人が多く居住する「鍛冶屋町」地域ではない。しかし、両者は発音が同じ「カジヤマチ」のため、混同して使用されることがある。明治14（1881）年冬に来鹿した県外人の白野夏雲（県勧業課課長）が、当時の鹿児島市街地の様子を七五調の名文で書き残した『かごしま案内』⁽¹⁵⁾は、その後も資料としてよく活用され誤解を広げたようである。それによると、

「縦横しけき士族町。石敢當に手折して。まつたてすちは（筆者注：まず縦筋は）二官橋。三官橋とかけていく。柿本寺（筆者注：城山西麓にあった寺）町鍛冶屋町。横筋間へは山之口。……」と、「加治屋町」と記すべき漢字を「鍛冶屋町」と誤記している。「天保年間鹿児島城下絵図」には、「高見バ、通」（高見馬場通り）の北側に「上之加治屋町」、南側に「下之加治屋町」と朱書きしてある（筆者注：境界はほぼ高見馬場通りと二本松馬場通りの中間）。この下之加治屋町こそ、西郷・大久保・大山・東郷らが育った地である。一方、明治政府は身分制度改革にも乗り出し、「四民平等」を掲げ職業・居住の自由を認めた。『鹿児島市史Ⅰ』所収の、明治13（1880）年に各戸長が調査し鹿児島郡役所に提出した戸籍簿（鹿児島市保管）をまとめた「士族と平民の居住地分布」表（770頁）によれば、「加治屋町」の居住者は、士族が408戸、平民が206戸と士族が約66%を占め、依然として士族中心の武家町の様相を呈している。

では、「カジヤマチ」に「加治屋町」の漢字を当てた由来（起源）は何なのかを次に考察してみたい。その際、初代藩主家久が鶴丸城及び城下町づくりに当たって、秀吉以降の島津家「三殿体制」を政治的にも一元化することが必要であり、養父義久（富隈→国分、1611年正月死去）の国分衆、実父義弘（帖佐→平松→加治木、1619年7月死去）の加治木衆、家久（内城→鶴丸城）自身の鹿児島衆など主たる家臣団の再編成も同時に進めたと考えられる。さらに、鶴丸城から離れた地の「加治屋町」居住者は下級城下士（一般武士）ということも特に念頭に置いた。

(15) 鹿児島県立図書館蔵、明治15（1882）年発行 * 『鹿児島市史Ⅲ』資料編に収録

「盛香集」(清水盛香著)⁽¹⁶⁾ 卷三「一 加治木一所成事」の項に次のような注目すべき内容が記してある。

「……元和五年家久公御同心被遊御上洛……(中略)惟新様へ奉附居候衆は直に被召附置事にて少も倍臣(筆者注：陪臣)など、申様なる事に而も無之由何ぞに付不被召移候而御支に成候人は時々被召移候其時分迄は二官橋三官橋より平の方は屋敷に成るとひの口溝を限り高麗町の方より新屋敷の邊は一圓田地にて候右二官橋三官橋溝付右衆を被召置候付此邊を加治木馬場と為申由加治木より鹿児島に召移候とて少も立身の筋にても無之由然れども……」

上記によると、藩主家久の実父義弘が加治木屋形(始良市加治木町)で死去した翌年の元和5(1619)年頃から、義弘付きの家臣と見られる加治木衆が必要に応じて鹿児島城下に召し移されている。移された加治木衆は陪臣(又家来)との認識はなかった。召し移しの頃までは二官橋・三官橋から平の(平之町)方面にかけて武家屋敷が立ち並び、「樋之口溝」(旧甲突川の川筋とされる清滝川)がその境(川の南側は樋之口町)で、甲突川右岸の高麗町や左岸の新屋敷一帯は全て田地であった。さらに、「二官橋三官橋溝」(清滝川)付近に「右衆」(加治木衆)を「被召置」(居住させ)たので、この地域を「加治木馬場」と称したという。加治木衆は鹿児島城下に移住しても、少しも「立身の筋」(出世になる)との認識はなかったという。この史料から、二官橋(山下小東側道路から山之口郵便局前にかけての通りに架かる橋)・三官橋(山下小西側道路から市電谷山線にかけての通りに架かる橋)、すなわち山之口町からその西北の平之町にかけた一帯はすでに武家屋敷が立ち並んでいたため、清滝川流域の空き地に加治木衆を移住させたと考えられる。

幸いなことに、江戸時代の上・下方限地区の武家屋敷地を通る主要道路の「馬場」や狭い道路の「小路」は、西南戦争・太平洋戦争における戦災後の2回の復興事業においても、道路拡張はされたがほとんど現地に活かされている歴史道路である。そこで、「加治木馬場」なる地域を特定する手がかりを求めて現在の清滝川(「溝」)の川筋を辿ってみた。城山西南麓から清滝川は南下して、西千石町の清滝公園(公園内に水神

(16)『薩藩叢書第三編』(薩藩叢書刊行会、明治41(1908)年)所収「盛香集五卷」64頁
『新薩藩叢書(三)』(歴史図書社発行、昭和46(1971)年)所収「盛香集」526頁

が祭られている)東北側の道路及び鹿児島中央高校東北側(グランド側)道路(城下絵図では「清滝川小路」に該当)下の暗渠を下り、山之口通り(「山之口馬場」と直角に交差し、次の交差点を左折した所(理容美容高等専門学校前)で、川は姿を現して東に向きを変え市電谷山線の三官橋通りに架かる「三官橋」、次の二官橋通りに架かる「二官橋」の橋下を流れて天文館公園に向かう(この区間は「清滝のこみち」として整備)。さらに、川は公園からは暗渠を下って公園南側から「清滝モール」下をパース通りと直角に交差し、道路下を済生会病院南側に下り、塩釜神社・塩釜公園近くで再び姿を現し、「がんがら橋」・「南林寺橋」・「清滝橋」等の橋下を流れて、鹿児島新港南側で鹿児島湾(錦江湾)に注いでいる。

そこで、「加治木馬場」に該当する地域は、清滝川流域のどの付近に想定出来るかを考えてみた。史料では清滝川について「とひの口溝」(樋之口溝)と「二官橋三官橋溝」と表現を使い分けている。前者は「一圓田地」の説明に使用し、後者は「加治木馬場」と結びつけて表現してある。また、二官橋・三官橋北側の山之口町から西北の平之町にかけては既存の武家屋敷地である。これらを総合的に判断すると、「清滝川小路」(中央高校東北側道路)沿いに流れる清滝川周辺から、その東側の三官橋通り(市電谷山線)にかけての地域に「加治木馬場」の地を想定出来るのではないか。その後、加治木馬場周辺から甲突川左岸の河川敷地帯にかけての空き地に、洪水時の浸水も覚悟したうえで、次第に城下の内外から下級武士が移り住む過程で、新しい馬場や小路も形成され、江戸時代中・後半期に見るような「加治屋町」の呼称が定着したと考えたい。つまり、最初に集住した「加治木馬場」中心の加治木衆の屋敷町に由来(起源)して命名されたことと結論づけたい。さらに『鹿児島城下絵図散歩』⁽¹⁷⁾で見ると、大体北限は「高見馬場」、南限は「山之口馬場」の南側の範囲内で、西側は「清滝川小路」周辺、東側は「三官橋通り」周辺に囲まれた地域が「加治木馬場」、すなわち加治木衆の最初の屋敷地と想定したい。現在の地図上では加治屋町地域のほぼ半分(東北側)の地に該当する。

(17) 塩満郁夫・友野春久編集、高城書房発行 *『旧薩藩御城下絵図』(県立図書館発行)の転載上に幕末と現在の道路・町名・逸材誕生地等を記入し対比理解に役立つ

鹿児島城下「加治屋町」地名の由来



鹿児島城下町加治屋町（『鹿児島城下絵図散歩』67頁）

特に幕末には「下之加治屋町」から多数の人材が輩出したが、その祖先たちも元禄期（1688～1703）前後からの移住組である。『西郷従道伝』（西郷従宏著）等の「西郷家系図」によれば、西郷隆盛・従道兄弟や従兄弟の大山巖の祖先は、南北朝期に南朝方で活躍した菊池武光（肥後国

菊池郡)の子孫で、元禄の頃の九兵衛が島津氏に仕え移り住んできた。大久保利通の祖先も『市来町郷土誌』によれば、大久保家系図に「徳川氏ノ中世頃鹿児島城下ヨリ封内ナル薩南市来郷川上ニ中宿セシヲ以テ利通ヨリ八代ノ祖ト推定セラルル仲兵衛ヨリ以下三代ノ墓ハ川上ニ在リ、五代ノ祖正右衛門ニ至リ城下ニ歸住ス」(835頁)と紹介している。一方、『地名が語る鹿児島の歴史』(著者平田信芳、かごしま文庫38、春苑堂出版)で、著者は『国分諸古記』収録の若宮八幡宮棟札祭文にある人名中の「郡方西郷八兵衛」に注目して、元禄期の西郷九兵衛の兄と推定すると共に、西郷家の祖先は肥後国の菊池氏ではなく、豊前国宇佐郡の酒井勝(宇佐八幡宮神官、10世紀初頭に大隅国桑原郡大領(長官))の子孫である。その子孫は土着して酒井氏・溝辺氏・西郷氏らに分かれ、西郷氏は中世までは桑西郷(旧隼人町・旧溝辺町付近)が生活根拠地であり、系図で示す祖先菊池氏説は西郷隆盛の「創作・演出」としている(149頁～152頁)(筆者注：西郷隆盛は奄美大島の龍郷に潜居中は菊池源吾の変名を使い、島妻愛加那との間に生まれた息子には菊次郎(のち京都市長)、娘には於菊(のち大山巖の弟誠之助に嫁ぐ)と名付けた)。また、東郷平八郎の祖先についても、宝治2(1248)年、関東から川内川流域に地頭として下向した渋谷五族の内、高城郡東郷の地(旧川内市東郷)に土着し、支配地名を名乗った東郷実重の子孫と紹介している(149頁)。

ところで、島津家の鹿児島宗家と加治木島津家は江戸時代を通して深い繋がりがある。「加治木古老物語」⁽¹⁸⁾によれば、初代藩主家久は実父義弘死去の翌年の元和6(1620)年、加治木屋形内に西の丸を築造し「中納言様御殿」とも呼ばれた。そこには嫡男虎壽丸(のち19代当主で2代藩主光久)の生母が移り住み、家久が滞在時は西の丸で政務を執った。義弘没後の東の丸には又八郎(加治木島津家初代忠朗、光久の弟)の生母が、家久の旧住居の中の丸には島津安芸守(福壽丸、光久の弟)の生母が移り住んだ。家久の没後、加治木屋形は代々加治木島津家の居館となり、鹿児島城下には鶴丸城正面に加治木家の屋敷地を与えられた(市役所別館の地)。加治木島津家は島津一門家の筆頭家として宗家に次ぐ格式の高い家柄となり、養子となって宗家を継ぐ2人の藩主(24代重年、25代重豪)も生み出した。重年は幕命による木曾川治水工事に必死に対

(18)『鹿児島県史料集(48)』(鹿児島県立図書館)所収9頁・10頁

鹿児島城下「加治屋町」地名の由来

処した。次の重豪は藩校造士館創設及び諸出版など教育・文化政策や財政改革に力を注ぐとともに、11代將軍徳川家斉の岳父（茂姫が御台所）となり、島津家の政治的・社会的地位を高めた。また全国の有力大名家と幅広く姻戚関係（息子を養子嫡子へ、娘を嫡子の正妻へ）を結ぶなど、後に薩摩藩が明治維新の原動力となる基盤づくりに貢献した。さらに、28代斉彬・29代忠義の人材育成策（意識改革、藩校・郷中教育の見直し、国内留学の奨励、洋学中心の開成所設立、英国・米国留學生の派遣等）もあって、鹿児島城下士（特に加治屋町など下級城下士）及び藩内の郷士から日本の近代国家づくりを担う多数の逸材が輩出した。

近世初期の島津義弘・家久父子時代及びそれ以降の鹿児島と加治木の深い繋がりやの延長線上に、幕末・明治維新期の人材輩出地「加治屋町」の地名の由来（起源）を考察してみたが、今後さらなる裏付け史料の発掘による検証が必要である。また、各地に残る各種の地名や呼称は、過去の歴史や文化（土地の成り立ちや人々が残した教訓など）を現代人に語りかけ、伝えてくれる貴重な無形文化財資料であることを改めて痛感している。

（鹿児島純心女子短期大学非常勤講師）